福島県立博物館紀要　第36号　2022年３月　p. 37－56

研究ノート

会津の医学史－中世・近世の医師に関する史料を中心に－

*渡邉　明
**高橋　充

はじめに
一　中世の医師と史料　（高橋）
二　近世の医師と史料　（渡邉）
（一）近世会津の医学史年表
（二）近世会津藩の医師
（三）近世末期の会津藩の医師
おわりに

はじめに

会津の歴史の中のさまざまな場面において、医師が登場し医学・医業のことが取り上げられることはあるが、それらを体系的に研究した成果は多くはない。松枝茂氏・友田康雄氏が、それぞれ編集した詳細な年表があり、また渡邉・高橋を含めて個別の研究はあるものの、なお検討する余地は残されていると考える（先行研究については〈参考文献〉等を参照）。末尾に付記したように、そのような問題関心をもった有志の研究会が、この研究ノートの書かれた背景にある。

以下では、とくに中世から近世を対象に、会津における医師に関する史料を紹介しながら、その活動のようすについて明らかにしていきたい。なお、執筆分担については、一章は高橋、二章は渡邉が担当し、それ以外の部分は両者が協議してまとめた。

一　中世の医師と史料

中世については、会津の領主となった蘆名氏の周辺に、断片的ながらも医療に関する史料と、医師（医家）の姿を垣間見ることができる。

田代氏一族

田代氏と会津の蘆名氏との関わりについては、拙稿「戦国時代の葦名氏と医療」（以下「前稿」）において、佐藤博信「田代氏の研究」に依拠しながら、次の三点を明らかにした。

①年未詳七月（夷則）二十日付け文松蔵主宛て「足利晴氏書状」（秋田藩家蔵文書　同内容の阿保文書あり『古河市史』八六〇）の内容から、宇都宮を本拠にしていた田代氏一族の文松蔵主という人物が、天文八年（一五三九）頃に、会津の蘆名氏（盛舜ヵ）の病気の治療に当たっていた。また、その帰参を促す古河公方足利晴氏からの使者として、同族の三喜斎（昌純ヵ）が派遣されている。

②年未詳十月（神無月）二十三日付け左月庵宛て「蘆名盛氏書状」（秋田藩家蔵文書　『福島県史』７　一〇八―九　同内容の奥州文書二あり『福島県史』７　三四―二）により、蘆名盛氏（盛舜の子）が、田代氏一族の左月庵（昌菊蔵主）から薬を送られ、その返礼をしている。この人物は、宇都宮を本拠とした田代氏一族でも、また別の家系とされている。

③弘治三年（一五五七）七月に蘆名盛氏（止々斎）が作成した「三喜斎秘法伝授」（簗田家文書）より、盛氏が「三喜斎秘法」と呼ばれる薬の製法の伝授を受けていたことが判明する。三喜斎とは、田代氏の一族で、とくに古河公方に仕えて沼森（茨城県八千代町）の地を本拠とした家系の人物であった。

なお前稿では、この史料の本文の一部を「若宮に伝ときハ檗ヲ三モ四モ加之」と読んだが、解読に一部誤りがあり、「若色少薄ときハ檗ヲ三モ四モ加之」と訂正する（阿部綾子氏の御教示による）。「もし調合した薬の色が少し薄い時には黄檗を追加する」という意味である。前稿では「若宮」と読んで盛氏の子息の盛興を指すと解釈したが、これも訂正する。ただし、家伝の法として蘆名家に相伝するという伝書の趣旨は妥当であると考えている。また前稿では、弘治三年時点で盛氏が「止々斎」号を使用していたどうかの判断を保

*会津医学史研究会　**福島県立博物館　会津医学史研究会

留したが、その後に公表した別稿「葦名盛氏の『止々斎』号－葦名氏発給文書の検討その一－」において、この時期から使用していた可能性が高いことを指摘した。

このように田代氏一族の中の複数名の人物が蘆名氏の周辺に現れ、また交流があったことが確認できた。医学史では田代三喜（斎）の名が最もよく知られており、実際に関東における政治の中核にいた古河公方の周辺で活動した医師として確認されている。三喜斎の名を冠した薬の製法が蘆名氏のもとに伝えられた背景には、①②に見られたような田代氏一族と蘆名氏当主との間のつながりがあったためと考えてよいだろう。

一方で、佐藤氏が強調するように田代氏一族の本拠はあくまでも宇都宮であり、古河公方との関係で古河に近い沼森に拠点を置いたり、北関東・南奥羽の諸氏のもとに一時的に滞在することはあったが、拠点を会津に移した証拠は今のところない。

この点に関連して、田代三喜斎と曲直瀬道三（一渓・初代）という医師の出会いの地「柳津」に関する議論がある。田代三喜斎の伝記類に見られる記述で、「柳津」（渡邉明氏の御教示によると全国に四ヶ所ある）の地を古河周辺とする説や会津の柳津とする説（『国史大辞典』「曲直瀬正盛」の項）等があるが、これまで述べてきたように、田代三喜斎が会津の柳津へ拠点を移したとは考えにくい。ただし、柳津には臨済宗の古刹円蔵寺があり、禅僧としての活動の中で会津の柳津への参詣や、修行のために一時的に滞在した可能性は残されていると考えている。

田代氏一族のように、医療行為を通じて古河公方や南奥の領主たちと結びつくような状況は、中世以前の医師のあり方としては広く見られる。盛本昌広氏は「丸抱えによる独占ではなく、様々な人々と多元的なネットワークを形成」していたこと、すなわち「医師の融通」や「薬・医療知識の融通」等が常態であったことを指摘している。蘆名氏周辺における田代氏一族の存在は、まさにそのようなものであったといえる。

糟尾宗頤

もうひとり蘆名氏の周辺で確認できるのは糟尾宗頤という医師である。近世に編纂された史書「会津旧事雑考」や地誌「会津鑑」（「会津鑑」の記事は、「会津旧事雑考」とほぼ同内容）「新編会津風土記」等に史料的根拠がある。

諸書の記事の内容は、ほぼ一致しており、以下のようなものである。

①宗頤は下野国糟尾村（栃木県鹿沼市粕尾）の出身で、天文年間に上杉憲政が越後に走った際に漂泊し、会津の伊南の地にいた時、蘆名盛舜（盛氏の父）に招かれて黒川へ居住するようになった。

②盛氏の代に向羽黒山城が築城された際に、新たな町が置かれ、山林も寄進された。後に宗頤町となり、山林は法眼山と呼ばれたという。

③盛氏の後継者である盛隆の代に、織田信長への使者となって上洛し、法眼に任官した。

①について、関東管領上杉憲政が北条氏の攻勢によって越後に逃れたのは天文二十一年（一五五二）初め頃で、蘆名盛舜の没年は天文二十二年（一五五三）八月（「塔寺八幡宮長帳」『会津若松史』８）とされているので、その間に出会う可能性がないわけではない。南会津の伊南の地は、関東から越後へのルート上にあるが、蘆名氏の本拠である黒川からは離れており、両者が遭遇する具体的な場面については検討の余地がある。

②については、向羽黒山城（岩崎城　国史跡）の築城は、永禄四年（一五六一）から同十一年（一五六八）頃であるが、その付近に現在も地名の残る宗頤町（会津美里町）のことと考えてよいだろう。

③については、天正九年（一五八一）八月、蘆名盛隆（盛氏の養嗣子）が織田信長に使者を送った時のことと思われる（「当代記」「信長公記」「会津旧事雑考」「会津四家合考」所収万里小路宛て蘆名盛隆書状等　『会津若松史』８）。諸書には使者として荒井万五郎、金上盛備等の名が見えるが、これに随行した可能性が考えられる。法眼の任官についての傍証は今のところない。

宗頤は、田代氏の場合とは異なり、蘆名氏に抱えられて、会津に居住するようになった医師の事例といえる。

以上の二例以外にも、蘆名盛氏が薬の提供を依頼できる医師として、「快庵」や「宗意」という人物がいたことも確認できる（年未詳九月七日付け蘆名盛氏書状写　橋本治男文書　『福島県史』７　七六―八）。「快庵」や「宗意」の薬は、隣国の田村隆顕の病気治癒のために盛氏が依頼したものであり、同盟関係にある領主間の外交の中の出来事である。

戦国期の蘆名氏の周辺に、このように医師の存在や医術・調薬をめぐる活動がしばしば見られるようになるのはなぜだろうか。入間田宣夫氏は、八条流馬術が伊達領や大崎領へ受容される過程を検討し、戦国期に各地の領主が京や関東の文化を受容するのは、自領における文化形成の志向、領国経営を推進するために領主自らの文化的教養の向上を目指す意欲の現れであると評価している。蘆名氏の事例をあらためて見直してみると、盛舜や盛氏など当主みずからが、医師との交流や医学・薬学の伝授を受けており、その志向性の高さが際立っている。戦国期の蘆名氏は、会津という地域を中心に領国形

成を進めるが、それは政治や軍事・外交あるいは経済などの方面ばかりでなく、文化や芸能にも及んでおり、その枠組みの中で評価することができるだろう。

二　近世の医師と史料

（一）近世会津の医学史年表

まず近世会津の医学史年表をまとめる。元になった年表は、松枝茂氏が昭和十六年に発表した「会津藩醫史年表」（『日本醫史学雑誌』一二九四号）と、昭和四十年に友田康雄氏がまとめた「会津藩医学年表」（『会津若松医師会報』）である。これに『家世実紀』等から医学に関係する事項を拾い出して、補訂した。

寛永四年（一六二七）徳川家康と蒲生氏郷の孫にあたる、会津六十万石藩主蒲生忠郷が痘瘡（天然痘）の病にかかり亡くなる。（『会津旧事雑考』）
寛永十年（一六三三）疥癬病（寄生虫による伝染性皮膚病か）が大流行。
寛永十七年（一六四〇）十月一日、保科正之は永田徳本の養子・日向徳遠（潜甫）を三百石で召し抱える。（五百石に加増されたと書かれた物もある）
正保四年（一六四七）正月八日、二本松藩主丹羽左京大夫光重に金田甫庵召し抱えられる。
正保四年（一六四七）五月五日、猪苗代城代沼沢出雲病死。澤茂庵・田中春佐（信兼）・中村松雲・一条善左衛門・田中玄興。
慶安二年（一六四九）四月二十三日、城代家老保科民部病死。糟尾慮庵・田中春佐。
慶安三年（一六五〇）医師服部玄沖は京都に遊学。
慶安四年（一六五一）六月二十七日、会津で徳性院（保科正之の側室）病気の為、渋谷香賑・澤茂庵・町医糟尾虚庵・田中春佐・佐原円斎・町医日出山則庵等が治療にあたる。日向徳遠は多忙につき江戸を離れられず。
承応元年（一六五二）正之公幕医土岐長元『輔養編』を選撰、四代将軍家綱に献ず。
承応二年（一六五三）二月十九日の項に中村芳庵・田中玄与の記載あり。
明暦元年（一六五五）六月十四日の項に町医師道悦（山中道悦）の記載あり。
万治二年（一六五九）八月二十一日、佐川勘兵衛病死。田中春佐・野村玄賀・日出山即庵。
寛文二年（一六六二）南蛮外科医岩田意慶（儀左衛門）を召し抱える。
寛文四年（一六六四）保科正之快癒の挨拶に医師井上玄徹を従え登城し、将軍大いに喜ぶ。
寛文十二年（一六七二）疾病大流行し藩では薬方を指示する。
寛文十二年（一六七二）保科正之が病気（ろうがい即ち肺結核）にて井上玄徹・平賀玄純・森雲仙・日向徳遠・井関玄説等治療にあたる。
延宝元年（一六七三）五月二十六日、町医西岡宗淑、若松の屋敷町に居住する。
延宝三年（一六七五）八月二十三日、見祢山社遷宮の記事に田中春佐・原宗的の記載あり。
延宝四年（一六七六）四月六日、正経の虫歯・頭痛の治療を田中春佐。
延宝四年（一六七六）七月二十日、おすは誕生。岡野玄益・田中春佐・原宗的。
延宝四年（一六七六）十一月二日、御切符取の年割・月割の記事に本道外科医師斎院春意の記載。
延宝五年（一六七七）六月十九日、おすは死去。岡野玄益・円城寺彦九郎・田中春佐・原宗的・日出山則庵・山中道悦。
延宝五年（一六七七）八月十二日、正経の足痛治療。中村升純・田中春佐・円城寺彦九郎・井関玄説・岩田権左衛門・服部玄仲。
延宝六年（一六七八）八月六日、正経江戸において病気快復。原宗的・井関玄説・平賀玄純・橋爪玄洞・井上玄徹。
延宝七年（一六七九）三月十五日、江戸で重四郎が疱瘡にかかる。橋爪玄洞・井関玄説・杉山検校・小川宗順・土岐格庵・平賀玄純・森雪仙・吉田策庵・山添宗積。
延宝七年（一六七九）四月五日、道中行列の規制第六九に「医師」、行列次第に医師田中春佐・同服部丹斎・同岩田意慶。
延宝七年（一六七九）七月二十五日、正経病気になり、玄純・森玄達・落合玄佐・橋爪玄洞・井関玄説・杉山検校・井上玄徹が治療にあたる。
延宝七年（一六七九）八月二十一日、江戸において一柳平左衛門病死。土岐格庵・太田元辰・平賀玄純・加藤青庵・井上玄徹・井関玄説。
天和二年（一六八二）十月三日、宜山様御一周忌之御法事。山田宗設。
天和二年（一六八二）十月八日、小原内匠病死。山中道悦・蓮沼玄栄・村本玄純・岡野玄益・服部玄沖が治療にあたる。
天和三年（一六八三）一月六日、御国目付柴田七左衛門・曽根源左衛門御用

相済会津御発足の見送り。田中春佐・関三琢。
貞享元年（一六八四）十月、御納戸樋口八右衛門、栄寿院様江被為附。岡野玄益・山中道悦（円城寺彦九郎）・原宗的・田中春佐・日出山則庵。
貞享二年（一六八五）八月二日、公儀御預人松平修理殿、絶食ニ而死去。原宗的・服部玄仲・金子友三・太田宗庵。
貞享二年（一六八五）八月一三日、松平修理殿死去ニ付、為検使秋田平太夫殿若松へ下着、勢至堂迄出迎。服部丹斎（本道）・岩田意慶（外科）・原宗的・服部玄沖。
貞享三年（一六八六）三月二十二日、御蔵入郡奉行飯田兵左衛門病死。蓮沼玄栄（本道）・岩田儀左衛門（外科）。
貞享三年（一六八六）四月五日、百姓農隙之時分、郷村江御目付御廻り被成之旨被仰出。藤田幽仙（外科）・岩田意慶・丸山玄推（本道・町医）。
貞享四年（一六八七）家老西郷頼母腫物に病み岩田意慶上京して治療す。
貞享四年（一六八七）六月二十九日、西郷頼母腫物の病に係り会津に暇下される。岩田意慶（外科）・杉本忠恵・太田宗庵。
元禄元年（一六八八）松平正容の時、学問奨励十二ヵ条を発令、医学については医臣の子弟は医学に精進すべしと命じた。町医でも医術に堪能なるものは、藩医に抜擢することを奨励した。
元禄五年（一六九二）囚人病気の折、町医に医療を申しつける。
元禄七年（一六九四）外科岩田意慶は二本松藩家老大谷彦十郎の腫物治療の為に出張する。
元禄七年（一六九四）町医朝野道伴は講義いたす由申込み許可される。
元禄十四年（一七〇一）藩では初めて御側医の役名を制定、橋爪玄洞・中村升純・服部壽慶・根本玄雄・関三琢・浦川玄意等に命ずる。
元禄十六年（一七〇三）医師望月孝意が法橋となる。
正徳四年（一七一四）江戸詰医師に森玄達と外科梶元良の名がある。
享保十五年（一七三〇）麻疹大流行。
享保十六年（一七三一）稲毛玄琢・古屋一庵・望月玄意・村本玄昌・服部友謙・鈴木玄説・大河内香庵・鈴木玄的ら三代藩主正容の治療にあたるが亡くなる。
享保十七年（一七三二）四代藩主容貞が疱瘡を発病、森嘉内・森養如・弟子の雲岱・津田宗庵・芥川元寿・河野松庵・村上養純等治療にあたる。
寛保二年（一七四二）公儀御医師松本善甫法眼はご機嫌伺いの為に会津に下向。善甫の先祖は会津の出身で松本良順の養父。
延享四年（一七四七）疱瘡大流行。
寛延三年（一七五〇）藩主容頌病気、津田宗庵・筒井壽庵・平賀玄純・渡部玄的・井上員泰・望月三英・原通玄・森玄孫等治療をする。
宝暦三年（一七五三）秋、麻疹大流行。
宝暦十三年（一七六三）春より疱瘡大流行。
明和元年（一七六四）婦人流産の予防法を指示す。
明和六年（一七六九）加賀山謙純・澤井昌玄・渋谷良哲・田中玄庵・斎藤玄良等御側医。
安永四年（一七七五）九月、疱瘡流行。
天明四年（一七八四）安積地方で疫病が発生、町医の富山玄純と木村玄太が治療の為に出張。
天明七年（一七八七）医師の子弟教育に南町の西講所医学十全館を設ける。
寛政三年（一七九一）安田忠を医学館講師とする。
寛政五年（一七九三）大河原教臣は儒医両科のため『仲景全書』を日新館に寄贈する。
寛政十一年（一七九九）会津藩では日新館の工事に係り、享和元年（一八〇一）落成すると、医学寮令条を定め本道・外科・小児科・痘瘡科・本草科が開設され、医師の子弟は十歳になれば入寮すべき条例を定めた。
享和元年（一八〇一）日新館医学寮の条令を定める。
享和元年（一八〇一）児島宗説が『脚気論』を著す。
享和二年（一八〇二）藩では医学試験法を定める。
享和三年（一八〇三）児島宗説が『仁寿編』を著す。
享和三年（一八〇三）五代藩主容頌病気の為、片倉元周江戸より二回往診あり、その他に恵美三伯・秋山玄瑞・児島宗説・児島君玉・橘宗仙院・伊東斎益・吉田盛方院・山本宗英・桂川甫周・杉田玄伯・塩川鯉一郎など治療するが逝去される。
文化二年（一八〇五）加賀山雲省、御側医として任命される。
文化八年（一八一一）医学館を建築し、廃止された西講所医学十全館の名を取って十全館と名づける。
文化八年（一八一一）百崎養軒、金瘡犬毒病（狂犬病のことか）の薬、および不持備の製薬を田中玄仙より皆伝される。
文化十四年（一八一七）児島宗説が『温疫論及び舌図解』を著す。
文化年間（一八〇四～一七）『会津藩教育考』によれば、横山周仙が長崎に遊学し蘭方を伝えた。これが会津藩の蘭方医学の始まりである。

文政二年（一八一九）安田忠、蔵書六百余巻を日新館医学寮に寄贈する。
天保五年（一八三四）加賀山潜龍（翼）二十四歳にして家業を継ぎ百石を給わる。藩に願い出て江戸に赴き奥医師多紀法印元堅について医学を学び、さらに池田瑞仙の門に入って種痘治療法を修めた。（加賀山潜龍の項を参照）
天保九年（一八三八）会津広田穢多町の薬園を医学寮に移す。
弘化二年（一八四五）吉村二洲（寛敬）は長崎へ遊学し蘭学・蘭方医学を学んでいる最中、嘉永元年（一八四八）に来日したオットーモーニッケから西洋医学と牛痘種痘の治療に関して直接指導を受ける。（吉村二洲の項を参照）
嘉永年間（一八四八～五三）佐藤元萇、江戸で「牛痘道しるべ」を書き表す。
嘉永六年（一八五三）佐藤元萇、会津に帰り種痘を行う。
嘉永六年（一八五三）吉村二洲（寛敬）は会津の医師達に種痘治療に関して講義を行い、この時の内容の一部を門人の森川春斉と佐藤祐益が書き記した口授『牛丹種痘児保護法』八項目が現存している。
安政四年（一八五七）の疱瘡流行に際して吉村二洲（寛敬）・馬島瑞園・宇南山宙斉等で若松城下並びに南会津郡下に於いて種痘を行う。
安政四年（一八五七）加賀山潜龍上京し、蘭学の大家伊東玄朴・織田研育に蘭方医学を学ぶ。
安政六年（一八五九）六月江戸家老横山主税常徳の提言により、江戸芝の会津藩邸に蘭学所を建て吉村二洲（寛敬）を助教とし、幕府の医官伊東玄朴・織田研斎、さらに萩の山根敬造に協力依頼し教えを仰いだ。
安政六年（一八五九）九月に会津でコロリ病が流行すると吉村二洲（寛敬）は藩命で会津に呼び戻され、山根敬造も同伴する。日新館医学寮に蘭学科及び舎蜜会が設立され藩医の加賀山潜龍（翼）・吉村二洲（寛敬）は蘭学科、山根敬造が舎蜜会（化学）の教授となった。さらに江戸三家老の横山主税常徳が御側医の加賀山潜龍に宛てた消息の文面に、医師達の子弟に対して遊学資金の方策が述べられており、この事を参考に加賀山潜龍と佐藤雄庵が計り遊学推奨資金財団をつくり遊学の道を開いた。（加賀山潜龍の項を参照）
安政六年（一八五九）飯豊山麓の山三郷の医師二瓶宗順（吉村二洲門人）は地域に天然痘が流行すると藩に種痘を願い出て認められる。
安政年間（一八五四～五九）江戸でコレラ大流行した時に、加賀山潜龍は江戸藩邸でコレラ治療法の蘭書を日本語訳『昆刺地格烈刺篇』（コンラッ・コレラ編）を出し世間に公開する。
万延元年（一八六〇）佐藤元萇幕府の医学館教授となる。
元治元年（一八六四）藩主松平容保が京都で病にかかり、土屋一庵・東条玄碩・渋谷昌益・鈴木宗甫・羽入謙良・竹内滑川等が治療にあたる。
慶應三年（一八六七）日新館に軍事病院を開設する。
慶應四年（一八六八）松本良順は子弟渡邊洪基（明治十九年から東京帝国大学総長）等四名を引き連れ軍事病院で戊辰戦争での負傷者の治療にあたる。

（二）近世会津藩の医師

『家世実紀』は寛永八年（一六三一）から文化三年（一八〇六）までの会津藩における出来事の記録を記述したものであり、『日新館志』は文政六年（一八二三）に完成した、日新館の構造・学制を中心に文武にわたる沿革を詳述しており、會津藩の学問・文化に関する文献である。『日新館志』巻七によれば、蒲生氏にも仕えた田中信兼や保科正之と共に高遠から会津に移り住んだ橋爪幸門、保科正之の父（徳川二代将軍秀忠）を治療した永田徳本に縁者の日向徳遠など様々な経歴を持った医師達が会津藩医として仕えた。
『家世実紀』には藩医の氏名は若干見られるが、経歴となると『日新館志』巻七には寛永十七年（一六四〇）頃から文政六年（一八二三）年までの藩のお抱え医師は一六四名の詳述があるが、要点だけの記述とする。

橋爪幸門
通称、玄洞という。父に従い高遠から最上に移住し、さらに会津に移り住んだのが幸門十四歳の時であった。平賀玄純に医学を学び、寛文五年十月給俸十口金五両。寛文九年二代藩主鳳翔公が高熱を発する病にかかると治療にあたり秩を二百石賜る。延宝年間初給金二十両。享保二年四月八十三歳で亡くなり、谷中経王寺に葬る。法性院道運日覺居士。

橋爪幸長
享保二年六月知行二百石。享保十二年五十九歳没、浄光寺に葬る。松壽院雪巖日榮居士。

橋爪幸綱
通称、玄洞という。享保十四年二月襲秩（世襲扶持）百石、天明四年四月職を辞す。天明八年七月七十二歳没、祥詮院儀英日了居士。

橋爪幸興
通称、玄閑という。天明四年四月番医、襲秩百石を賜る。享和二年二月安部井鱗（澹園。儒学者）らと共に医療の検定を収める。同年五月医学教授を兼

務、八月準班侍医（側医）、同年三年四月教授に任ぜられ、文化二年十二月歳給一両を賜る。文化六年十一月五十七歳没、仁良院智養日生居士。

渋谷香賑

寛永五年四月医学が抜きんでることから給俸二十石、同年十二月更に秩百石を賜る。慶安五年六月五十石加増。天和二年八月九十三歳没、善龍寺に葬る。春庵宗心居士。

渋谷香賑

通称、長庵という。天和二年十二月医師、襲秩百五十石。元禄十四年八月侍医。享保六年正月七十五歳没、能活院換山壽霊居士。

渋谷良哲

享保五年二月医師として襲秩百五十石。同十二年江戸に遊学。寛保元年五月五十歳没、青松寺中吟窓院に葬る。直指院哲膺禅良居士。

渋谷良哲

寛保元年七月医師、襲秩百五十石。宝暦十一年九月侍医。天明三年四月五十九歳没、藍香院漲山流翠居士。

渋谷良哲

天明三年七月襲秩五十石。寛政元年十二月五十歳没、皎月院中山玄明居士。

田中信兼

通称、春佐。先祖は蒲生氏にも仕える。正保四年七月医療抜きんじ給俸二十石を賜る。承応二年六月秩百石となる。貞享二年七月七十一歳没、高巌寺に葬る。三誉春佐心阿居士。

田中知綱

通称、玄震。坂井久次の嫡子、田中信兼の嗣子（跡継ぎ）。貞享二年十月医師、襲秩百石。同十一年十一月五十五歳没、覺誉玄震居士。

田中常信

通称、玄賑。元禄十一年十二月医師、襲秩百石。元文五年十二月六十八歳没、光誉玄賑了常居士。

田中安道

通称、春佐。元文六年二月医師、襲秩百石。宝暦十二年十二月没、来茲院還誉願無居士。

田中安信

通称、文庵。義父奥田氏、安道の嗣子（跡継ぎ）。宝暦四年二月肄業料（学費）五口（五人扶持）。同十二年二月医師、襲秩百石。明和五年正月準班侍医。安永三年八月歳給（年間手当）薬料金五両、安永五年二月増五両。同九年正月加職料秩五十両。天明六年正月職科内三十石。寛政元年十二月進班右筆下、同六年正月職料二十石。同十一年三月七十九歳没、霊通院洞誉文庵居士。

田中安満

通称、雲瑞。安永六年三月肄業料五口、池原雲伯に学ぶ。天明二年七月歳給薬料金五両。同十一年五月侍医、襲秩百五十石。文化元年五月増金五両。同十二年三月致仕（職を辞す）。

角田益庵

寛文十年六月馬医給俸二十米十五石。延宝八年三月増俸十米五石。元禄元年十月疾医、同六年正月進班独礼。同九年二月五十五歳で江戸にて亡くなり、泉岳寺門良院に葬る。即室了心信士。

角田則員

通称、益庵。後藤曽右衛門三男、益庵の義子（養子）。元禄八年六月医師給俸三十米十三石。正徳四年四月進班独礼。寛保二年二月七十六歳で亡くなり、宝昌寺に葬る。一以道貫居士。

角田従員

通称、益庵。後藤喜右衛門三男。則員の義子。元文二年七月医師給俸三十米十二石。宝暦二年五月進班独礼。明和元年八月番医。同三年五月六十八歳で亡くなり、泉岳寺門良院に葬る。郭山了然居。

角田常勝

通称、益庵。佐瀬右門三男。従員の義子。明和三年七月番医給俸三十米九石。天明元年十二月増俸十米二石。同三年正月準班侍医。寛政八年十二月六十九歳没。仁山道口居士。

森　玄達

先祖は紀州熊野森村地頭丹波守、父は勢州亀山半右衛門。延宝六年十月医師給俸十口金十両。元禄十六年三月準班侍医。正徳四年十二月亡くなり箕田連上寺に葬る。自證院幽誉玄達通善居士。

森　玄達

正徳五年三月医師給俸七口金七両。享保十三年増俸三口。延享二年正月没。幽遠院清誉玄達定善居士。

森　玄達

延享二年二月医師給俸八口金六両。宝暦十二年七月嬰疾（病気）国元に帰る。寛政元年六月亡くなり大法寺に葬る。脩徳院浄現日照居士。

森　俊齋

明和四年十月医師給俸六石金五両。寛政八年加職料金一両。同十二年十月没。秀嶽院觀月日諦居士。

林　利尊

通称、亀庵。利晟の六男、利晟は保科家に仕え二百五十石を賜う。利尊は延宝六年坊主給俸二口金三両。元禄六年七月益金二分。同十一年番医、元文二年十二月致仕。寛保三年五月八十七歳没、恵倫寺に葬る。亀庵玄鶴居士。

林　利孝

通称、亀庵。元文二年十二月義父の跡を継ぎ医師となり、給俸二口金三両二分。安永三年五月致仕。天明元年十月七十六歳没、機山全霊居士。

林　利宗

通称、昌庵。安永三年医師給俸二口金三両。寛政九年没、得玄院道穏居士。

村本清綱

通称、玄碩。出自は菅原氏。子孫は加藤氏に仕える。清綱医学を平賀玄孝に学ぶ。貞享四年十一月医師給俸五口。元禄二年二月増俸五口、同六年十月増俸五口。同八年十一月更に百石を賜る。宝永五年二月致仕、給俸三口。正徳三年十一月七十九歳で亡くなり一乗寺に葬る。哲養院諦誉善聴居士。

村本清敏

通称、玄昌。宝永五年二月医師襲秩百石。正徳四年四月主君より手書（手翰）十二枚を賜る。元文四年九月七十五歳没、晴雲院獨誉来山居士。

村本尹清

通称、玄碩。享保十八年六月医師襲秩百石。延享元年五月四十六歳没、恵明院廣誉普観居士。

村本清因

通称、玄雄。延享元年七月医師襲秩百石。明和六年江戸で学ぶ、肄業料（学費）五口。寛政九年正月六十一歳没、養壽院雄誉英哲居士。

池内玄丹

始め九左衛門。先祖は高遠枚田氏に仕え二百石を賜る。玄丹幼い時に父が亡くなり、仙台の外戚池田太惣右衛門に頼り瘍医学を学ぶ。後に馬嶋明院に眼科を学ぶ。会津藩では瘍医師として給俸四口米十石を賜る。宝永四年十一月亡くなり、本行寺に葬る。實教院連宗日要居士。

池内玄丹

父と同名。履歴不詳。享保十六年三月没、自教院法善日賢。

池内宣高

通称、玄丹。享保十五年父の跡を継ぎ医師となり、給俸二口米八石。元文二年十一月進班独礼。同四年三月番医。宝暦元年九月益俸一口米二石。明和九年十一月七十一歳で亡くなり、浅草本法寺に葬る。要信院自閑日逮。

池内彌濟

通称、玄瑞。宝暦四年五月江戸にて学ぶ、給俸五口（五人扶持）。安永二年正月義父の跡を継ぎ番医、給俸二口米七石。同九年正月進侍医益俸二十口。天明元年十月歳給薬料金五両。同三年益金五両。寛政六年十二月秩百石を賜る。文化六年六月執政に参加の命を賜る。同九年三月八十歳没、智宣院法意日嚴居士。

土屋清秀

通称、一庵。野出清次二男。元禄元年十月医師給俸五口。同八年九月秩百石。同九年六月江戸に移る。正徳元年三月歳給薬料金三両。同二年三月益秩五十石。享保十七年六月七十二歳で亡くなり、専福寺に葬る。暁照院程過月貞。

土屋清要

通称、一庵。享保十七年八月医師襲秩百五十石。寛保元年九月江戸に移る。延享二年九月四十五歳で亡くなり、大井村西光寺に葬る。瞪真院浄玄信士。

土屋清温

通称、一庵。延享二年十二月番医襲秩百五十石。安永元年六月準班侍医。天明八年二月歳給薬科金五両。寛政九年正月七十七歳没、正真院釋浄了居士。

望月安春

通称、孝意。安勝二男。元禄二年正月給俸二口金三両。同十年八月進班独礼。同十五年四月準班侍医。同十六年三月京都に登り法橋に任ぜられ、六月進班。宝永三年四月亡くなり、實相寺に葬る。孝意法橋宗順居士。

望月庸春

通称、玄意。宝永三年七月給俸二口。享保十二年六月医師益俸三口。宝暦四年九月没、要道玄意居士。

望月安綱

通称、孝意。宝暦四年十一月医師給俸五口。同十四年没、功齋良丹居士。

望月矩満

通称、元伯。宝暦十四年十月医師給俸五口。安永三年十月没、養真良頤居士。

望月安奥

通称、養珉。安永三年十二月医師給俸五口。寛政六年八月江戸にて学び、給肄業料俸五口。文化八年四月五十四歳没、夏林道薫居士。

山内道救

通称、元竹。父壽齋。儒医は今大路延壽院坂壽三法印に学ぶ。加藤氏の時、

町医師。その後、尼崎城主青山大膳亮に仕え秩二百石、俸十口および乗轎料（駕籠代）金二十両を賜る。嗣子が無く道救は養子の為、土佐の道壽医範を慕い太田嫌好院に学ぶ。岩城城主内藤左京亮の招きにより秩二百石、俸十口を賜る。元禄十五年九月会津藩医として給俸五口、宝永七年三月歳給薬料金五両。享保二年七月増俸三口。同十四年亡くなり、大窪山に葬る。静壽齋道救儒士。

山内玄禎

享保十一年二月番医給俸八口。延享二年十二月増俸三口、江戸に移る。宝暦三年六月亡くなり、箕田長運寺に葬る。開示院宗悟信士。

山内要庵

宝暦三年番医給俸十一口。明和四年二月没、宗順院軒道居士。

山内持光

通称、元養。三浦昌風の二男、山内要庵の嗣子（家督を相続する子）となる。明和四年四月番医七口。安永七年七月須田玄谷に学ぶ。寛政六年十二月職料二口加増。享和元年正月準班侍医、同年八月侍医二口加増。文化二年九月六十三歳没、天寧寺に葬る。金勝院山養持光居士。

山内春方

通称、元養。文化二年十一月番医給俸六口。十二月致仕（辞職）。

荒井治住

通称、求意。元禄十四年十一月医師給俸十口。享保九年正月侍医。同十八年九月致仕。延享二年六月没、本覚寺に葬る。忠善院日誠居士。

荒井治孝

通称、元庵。兄新井治喜に代わり、二男治孝が跡継ぐ。享保十八年十一月医給俸五口、元文四年三月医師。宝暦五年十二月五十五歳没。浄誉道清居士。

荒井典見

通称、文碩、嶋林藤兵衛二男。新井治孝の義子（養子）。宝暦六年三月医師給俸三口。寛政三年十二月準班侍医。寛政九年十二月六十五歳没、滝沢小山に葬る。花月神霊。

荒井治喜

通称、孝庵。享保二年十月医給俸五口。同十八年十一月益俸（増俸）二口。寛延元年七月六十三歳没、本覚寺に葬る。清了院秋巖日竟居士。

荒井意治

通称、昌伯。延享五年医給俸六口。明和九年六月五十八歳没。遠成院久唱日題居士。

荒井治著

通称、孝庵。木村敬則の弟、荒井意治の義子。明和九年八月医給俸五口。寛政十二年正月加職料俸二口。文化四年二月五十六歳没、良恭院孝庵日徳居士。

澤井良孝

通称、周安。延享元年正月侍医給俸二十口。寛延二年二月七十三歳没、大窪山に葬る。中醫院奥挙開屋周安居士。

澤井良親

通称、昌元。寛延二年四月侍医給俸二十口。宝暦元年江戸に移る。同二年八月歳給薬科金五両。同三年四月増金五両。同十一年十二月秩百石賜る。明和三年十一月加職料扶持五十石。天明五年七月致仕。同八年二月七十七歳没、頓教院乗挙法海昌玄居士。

澤井良美

通称、周藏。安永九年正月小番給俸五口。天明五年七月襲秩百五十石。寛政四年九月近習。文化三年十二月歳給薬科金五両。同八年進班目付上。同十一年三月五十八歳没、健徳院忠挙奥仁玄周居士。

星野玄卜

進班独礼。針・按摩。宝永二年辞職。同五年四月八十三歳没、浄光寺に葬る。真巖宗淳。

星野雲意

名は應孝、通称雲意。享保十三年正月辞職。元文三年十一月没、法善院道浩日養。

星野玄碩

享保十三年正月医給俸二口金三両。同十五年三月疾針両医の任に当たる。元文四年十月本道・針医。安永三年七月辞職。天明七年四月八十六歳没、法善院浄随日等信士。

星野秀碩

塔寺八幡祠堂戸内越中守が弟。星野玄碩の嗣子。安永三年七月医給俸二口金二両二分。天明四年四月六十一歳没、秀岸院清幽日見信士。

星野玄春

天明四年六月医給俸二口金二両。寛政六年十二月二十九歳没、本住院雪巖日躰信士。

平井房言

通称、喜哲。出自は高望王桓武天皇の曽孫（ひまご）で平姓を賜る。その遠裔（遠い子孫）平井明嘉は蒲生氏に仕え、次いで加藤氏に仕え扶持百五十石

を賜る。その子角太夫は平井房言の父なり。正徳元年十月坊主として給俸三口金三両。延享二年五月轉番医として給俸八口、同八月準班侍医、明和四年四月増俸五口。安永九年十月亡くなり実相寺に葬る。貞性院明圓日覺居士。

平井房成

通称、宗益。渡部光春の嫡子（本妻が生んだ長子で跡継ぎ）、平井房言の嗣子となる。寛保元年十一月坊主給俸二口金三両。延享二年七月医業学び、安永二年医師給俸十三口。天明元年十二月準班侍医。寛政元年十二月六十五歳で亡くなる。醫王院法玄日印居士。

平井房種

通称、宗益。寛政二年正月医師給俸十口。同三年十二月医学句讀師、同九年閏七月轉学正。文化八年五月準班侍医。同年十月五十三歳で亡くなる。大法院良随日観居士。

吉岡長堅

通称、昌元。正徳四年九月医師給俸十口、同六年八月増俸十口。享保八年三月侍医。同十一年十月亡くなり、箕田薬王寺に葬る。乗至院到岸居士。

吉岡長逸

通称、昌乙。享保十二年二月医師給俸十口。寛保三年四月増俸五口、寛延二年六月増俸五口。宝暦二年四月侍医、同十一年八月更に百石賜る。明和三年六月亡くなる。法乗院宗達日運居士。

鈴木重喜

通称、玄的。医学を讃州長尾全庵に学ぶ。元文二年六月進班歳給米三十苞。延享四年六月医師さらに給俸二十口。寛延四年四月七十六歳で亡くなり、見性寺に葬る。仙樹院皎誉杏陰宝山居士。

鈴木重房

通称、玄秀。宝暦元年五月医師給俸二十口、同九年四月歳給薬料金五両。同十年十月増金五両。明和元年十二月扶持百石を賜る。同六年十二月六十七歳で亡くなる。奥運院永誉杏養泰山居士。

鈴木重恭

通称、玄通。官医（幕府に仕える医師）森雲貞に学ぶ。宝暦十二年三月肄業料五口。明和七年正月医師襲秩百石安永八年十月準班侍医。天明元年九月進班、同五年七月侍医。同八年五月歳給薬料金五両。寛政四年十二月増金五両。同八年正月加職料秩三十石。同九年正月五十八歳で亡くなる。覺源院轉誉入法不山居士。

鈴木重記

通称、雲照。官医森雲貞に学ぶ。寛政三年七月医学学正に任ぜられる。同年十二月肄業料三口、同九年三月医師襲秩百石、文化五年六月準班侍医。同十年二月相州観音崎。同年十月五十四歳で亡くなり、腰越山に葬る。源勝院光誉法山玄秀居士。

根元道由

通称、醫安。享保十年八月亡くなり、林昌寺に葬る。貫奥院通元了達居士。

根元道寛

通称、醫碩。医師給俸十口。享保十八年十二月三十九歳で亡くなり、大窪山に葬る。廣巖院大翁醫碩庵主。

根元道豪

通称。醫碩。享保十九年二月医班独礼給俸七口、寛保二年八月増俸五口。同三年七月薬料金五両。寛延五年二月増俸五口。宝暦三年五月疾醫瘍醫にかかり同九年六月四十四歳で亡くなり、萬年山青松寺に葬る。達外義道居士。

根元道頼

通称、俊丈。宝暦五年三月肄業料五口。同九年八月医師兼瘍医給俸十二口、同十年十月薬料金五両。安永十年二月加俸三口。天明五年十二月加職料米二石。寛政元年十二月加俸三口。同五年正月準班侍医。享和二年九月職料俸三口。文化六年六月致仕。同年十月七十二歳没、本相浄心居士。

齋藤懿政

通称、玄良。生まれは東條氏、齋藤玄智の嗣子。安永二年十月侍医給俸二十口。安永四年二月給薬料金五両。天明五年正月増職料俸三口。同七年十二月秩百石。寛政五年六月致仕。同十年八月七十九歳で亡くなり、恵倫寺に葬る。鶴壽院瑞倫良祥居士。

齋藤芳房

通称、玄智。天明七年正月給肄業料三口。寛政五年六月襲秩百石。同七年十二月準班侍医、同九年四月侍医。文化十年正月七十二歳没。濟俊院智翁了覺居士。

西田老久

通称、泰庵。元文四年九月番医給俸十五口。宝暦十三年六月増俸五口。明和七年六月準班侍医。天明四年十二月歳給薬料金五両。寛政八年三月七十八歳で亡くなり、地光寺に葬る。定岳院順誉了勝居士。

三浦昌風

通称、壽庵。宝暦四年二月番医給俸十口。同年十月歳給薬料金五両。同五年八月歳給費料金三両。同十年三月公朝に従い京に、給金十両。同十十二年九

月増薬料金五両。明和七年六月準班侍医。天明二年八月江戸で亡くなり、愛宕山下孝壽院に葬る。延齢院昌風壽庵居士。

三浦元仲

宝暦十一年十一月給俸肄業料五口。天明二年十月番医給俸十二口。同八年五月歳給薬料金五両。同九年七月準班侍医。寛政五年四月没。諡号は古三元仲。

三浦雄貞

通称、長庵。寛政五年八月番医給俸八口。会津に帰り医術を学ぶ。文化三年五月致仕。

高橋玄養

宝暦四年十月亡くなり、清林寺に葬る。徳誉玄養居士。

高橋春望

高橋孝順、通称春望。宝暦十年三月亡くなり、大窪山に葬る。孝誉聖順居士。

高橋隆奥

通称、玄順。宝暦十年医師給俸三口。安永八年江戸に遊学。寛政元年加職料俸三口。同五年十二月給薬料金三両。同七年十二月進班独礼。文化七年十二月職料俸為真加俸三口。相州観音崎に移居。同十三年六月七十一歳で亡くなり、鴨居村西徳寺に葬る。高誉隆奥居士。

加賀山盛昌

通称、兼純、号省齋。川村氏二男、加賀山盛政の嗣子。明和三年正月給俸三口、同年三月金五両を賜る。同年九月番医給俸二十口。同四年九月侍医。同五年三月歳給判金二枚。同年九月歳給薬料金五両。同七年四月増金五両。安永四年九月六十歳で亡くなり、大窪山に葬る。秀応寺。無量院正誉覺山居士。

猪俣安孫

通称、玄説。明和七年三月平坊主。天明四年九月会津に帰る。寛政十一年十二月轉医。文化七年四月五十一歳で亡くなり、本光寺に葬る。諡号は釋種善立。

塚原美受

通称、恭伯。天明八年十二月歳給米十苞。寛政六年正月増米十苞。同十一年三月番医給俸五口。享和二年七月六十一歳で亡くなり、實成寺に葬る。本壽院恭伯修徳日量居士。

羽入義英

通称、良説。寛政元年十一月歳給米二十苞。同五年十一月侍医給俸十八口。同六年三月歳給薬料金五両。同十一年六月増金五両。文化三年十月致仕。同六年五月五十五歳で亡くなり、融通寺に葬る。嚴浄院光誉良説居士。

百崎重方

通称、養軒。父は平出重義、のちに外家氏や百崎氏。寛政五年正月大書院。同八年正月小書院。享和三年八月給米二十苞。文化四年七月假番医給俸五口。文化五年七月五十四歳でなくなり、善龍寺に葬る。験効院道山良醫居士。

目黒致貫

通称、玄益。先祖は荒川清兵衛、伊達政宗に仕え、摺上の戦い後会津に移る。孫の市左衛門より目黒姓。貫則の孫なり。明和二年四月大書院。安永二年三月小書院。寛政四年十二月二十苞。同九年四月侍医に抜擢、江戸に移り、給俸十一口。加職料四口。同年十二月歳給薬料金五両。同年十二年正月歳給費三両。享和元年正月増薬料金五両。文化二年会津に帰る。同年九月増職料俸三口、同十二年六月致仕。同十四年六月七十八歳で亡くなり、見性寺に葬る。幽玄院探誉甫庵居士。

川村玄庵

宝暦十年十一月侍医、給俸三口薬種料金三両。明和二年十二月増給俸三口。同五年九月増薬種料金二両。天明七年十月病に罹り、五十四歳で亡くなる。

野村玄賀

扶持百石。履歴不詳。

横田俊益

儒学者。医に優れる。他不詳。

大森固庵

儒・医。他不詳。

岩田意慶

儀左衛門と称す。加賀の人。伯母が嫁ぎ先の木村不乱は南蛮瘍医師（潰瘍医師か）なので、その奥義を授かる。二百石で迎えられるが欲が無く固辞し、給俸十口米二十石で藩医となる。

岩田意慶

父の名を継ぐ。襲秩百五十石。元禄十年六月嫡子昌慶に家督を譲る。

岩田昌慶

襲秩百石。享保七年五月侍医。延享二年三月亡くなる。清光院月峯信士。

岩田昌庵

昌慶の第四男。享保十一年七月給肄業料俸五口、元文四年十二月襲秩百石。寛保元年八月侍医、歳給薬料金十両。宝暦七年十月江戸で亡くなり、光宝寺に葬る。雪峰院松瑞信士。

岩田権左衛門

岩田権左衛門は加藤氏の家臣である山本加右衛門の子として生まれ、岩田意慶の養子となる。寛文元年七月二本松丹羽氏給秩二百石、俸十石を賜る。元禄十二年六月二男五郎大夫を跡継ぎとして家乗残缺（家の記録を残さず）、未詳。

岩田知足

岩田意慶の嫡子（正妻の子）、昌慶は兄。初給俸四十米、二十五石。元禄七年給俸五口、更に秩百石を賜る。正徳元年十一月職を辞す。享保十四年六月八十二歳で亡くなり、天寧寺に葬る。満壽院了山知足居士。

日向徳遠

潜甫とも称し、多田満仲の次男であったが、甲斐徳本の養子となる。藩邸に出入り、寛永十七年三百石を賜る（日新館誌では百口とある）。その後のことは『旧證類聚』によれば、日向徳遠は五百石・中村芳庵は三百石・田中春佐は百石・服部丹斎は百石とあり、日向徳遠は五百石に加増となっている。延宝三年十一月六十歳で亡くなり、渋谷長谷寺に葬る。蘊奥院安室徳隠居士。

藤田了甫

履歴不詳。

服部壽慶

寛文七年十月侍医に抜擢され給俸二十口。元禄十二年十月百石賜る。宝永元年七月七十六歳で亡くなり、観音寺に葬る。誓光院本誉元冲居士。

服部丹齋

秩百石。履歴不詳。享保六年六月亡くなり家断絶。

吉村芳庵

初め澤茂庵と称す。秩三百石。

田中玄與

摂州梶折村の人。秩二百石。延宝七年三月亡くなり、浄光寺に葬る。宗久院玄與日豪。

高峰宗時

通称、可雲。母は伊勢大和守の娘。小さな頃より医学を学ぶ。延宝五年十一月江戸で亡くなり、白金立行寺に葬る。

浦川貞親

通称、玄意。延宝五年番医給俸十五口。元禄十四年六月侍医、秩百石。宝永二年致仕。同七年九月七十五歳で亡くなり、浄光寺に葬る。通玄院道意。

田母神顕栄

通称、梅庵。父顕政は三春田村氏に仕官、福島で亡くなる。寛文四年四月顕栄は秋月佐渡守種信仕え秩百石。同六年辞す。同十年三月丹羽左京大夫光重に仕え、秩百石。延宝六年十月辞す。元禄二年二月加藤越中守明英に仕え、給俸二十口。後に辞す。同十三年八月再び丹羽光重に仕え、二十口。正徳三年五月江戸にて亡くなり、芝の松林山金知院に葬る。梅庵浄信大徳。

関　三琢

秩二百石。寛文中記録書に二百五十石とあり、元禄十四年六月侍医。

関　了琢

了琢のちに三琢と改める。元禄十五年八月家督襲秩を継ぐ。宝永二年十月秩を辞して隠居、給俸七口。

太田宗庵

元禄五年十一月大君の使い安部豊後守の命で登城官医に抜擢。法印に任ぜられ、謙光院と称す。

山田宗説

元禄八年十一月俸米を辞す。正徳四年正月亡くなり、天寧寺に葬る。大了関徹居士。

中村舛運

俸二十口。秩百石。

鈴木殷盈

通称、雲説。祖重之官医森雲仙に学ぶ。寛保三年假医師、延享元年正月番医給俸二十口。宝暦二年十月侍医。同五年正月亡くなり、見性寺に葬る。三世院通誉杏種養説居士。

鈴木殷親

通称、玄説。明和四年五月番医給俸十五口。

山川玄周

医師給俸二十口。元禄十一年三月病のため俸を辞す。猶給五口。同年十月六十四歳で亡くなり、浄光寺に葬る。薬彦心霊。

有部道益

享保六年三月江戸に来る。その他不詳。

岡野玄益

土屋清秀の弟。侍医秩二百石。元禄四年二月心疾のため秩を辞す。家断絶。

金子仲和

幼称小左衛門。宝永三年十月医師。享保二年九月秩没収。

梶　景賢

通称、玄良。梶原景盛の四男。医師自俸五口。秩百石。享保五年二月亡くな

る。賢浄智山居士。

梶　元昌

景品の二男。嗣子早世、家断絶。

津田宗庵

元文四年十二月百石。寛保三年七月加職料秩五十石。その他不詳。

大河原武昭

通称、杏庵。享保二十年三月医師給俸二十口。元文二年侍医。寛保二年八月秩百石。延享三年九月病のため職を辞す。同五年七月六十四歳で亡くなり、高巖寺に葬る。安清院浄誉杏庵居士。

大河原武濟

通称、杏庵。元文四年十二月給肄業料俸五口。寛延元年八月襲秩百石。宝暦六年四月準侍医、安永七年二月侍医。天明五年二月致仕。寛政三年十月七十九歳亡くなる。仙量院覺誉壽心居士。

大河原武貴

通称、養純。明和二年八月給肄業料俸五口。天明五年二月番医襲秩百石。同年七月準班侍医。同六年八月侍医。寛政六年十二月加職料秩三十石。享和三年九月致仕。文化二年三月六十四歳で亡くなる。恭敬院安誉養純居士。

筒井久誠

通称、藤庵。寛保四年正月侍医給俸二十口金二枚。寛延四年正月病で職を辞す。宝暦九年復職給俸三口。同十四年二月七十歳で亡くなり、大窪山に葬る。寺は西竜寺。釋種可夕。

（以上、『日新館志』巻七より）

目黒道琢（尚忠）

元文四年（一七三九）三月十日、目黒伊左衛門重満の次男として会津柳津野老沢で生まれる。字を嘉謙・恕公、諱は尚忠、あるいは豊全とも称す。会津若松愛宕町の保科家侍医平井喜哲に就いて医学を学び、師命により江戸に出て典薬頭今大路道三の門に入り医学を学び、道三の一文字を賜り道琢と改名して、さらに目黒姓に復帰したと『目黒氏家系図』にはある。医学に精進し、明和二年（一七六五）多紀元孝は幕府に申し出て医学校躋寿館（のちの幕府医学館）創立の際に、道琢は招かれて緒生を訓育する。医学館創建時から官医の子弟教育の任にあたること三十四年間、寛政十年（一七九八）六月徳川十一代将軍家斉に奉謁を許され、道琢の医能を賞し幕医となし法眼に叙せられ高官吏の列に加えられる。しかし惜しいことに病苦しみ寛政十年（一七九八）八月三十日に六十歳で亡くなり、東京市ヶ谷月桂寺に葬る。考証学派の巨頭多紀元簡は目黒道琢碑文の中で、事績について賞讃しており、考証学派の最重要人物とされている。

石田龍玄

文政元年（一八一八）河沼郡金上村で生まれる。刻苦励精の結果、会津藩御側医となる。戊辰の役後に東京本所に漢方医として開業する。名医として聞こえ患者は常に列をなしたといわれている。明治八年に亡くなる。

大岩勝長

寛政八年（一七九六）若松城下に生まれる。江戸に出て搞保巳一に師事し勤学すること数年。特に植物に精通していた為に、選ばれて日新館医学寮の師範となり奉職すること数十年、班席一の寄合となる。元治二年（一八六五）二月二十六日亡くなる。

佐藤玄孝

文化六年（一八〇九）四月十五日耶麻郡木幡村（現・山都町）で医者の家に生まれる。儒学を志し江戸の昌平黌に学び、古賀伺庵に師事し儒学のかたわら医業を浅田・熊川両氏に学ぶ。帰郷後医業に従事。明治初め河野広中らと交わり自由民権を説く。医業のかたわら私塾を開いて儒学を教え、学ぶ者三百人に及ぶ。明治二十二年町村制の施行に際し、山都・木幡・小川・山郷の合併により初代村長となり二期勤める。明治三十三年五月十六日亡くなり、村民・門人らにより碑を建て永く功績を顕彰する。

佐藤元萇

医師で儒学者。文化十四年（一八一七）佐藤重俊の男として生まれ、名を賜萇、号は応渠と称す。高津泰（淄川）から儒学を学び、天保十四年（一八四三）江戸遊学中に二人扶持を賜る。多紀元堅について医学を学んだ。

その後に多紀塾の塾頭となった。嘉永年間（一八四八～五三）江戸で「牛痘道しるべ」を書き表す。嘉永六年（一八五三）会津に帰り種痘を行う。さらに安政四年（一八五七）幕府の医学館医書校正となり、講師を経て、万延元年（一八六〇）医学館教授となる。会津藩の『文久分限帳』に佐藤元萇の名前は無いが、慶応元年の『慶応會津藩分限帳』に「五人扶持、御側医師格医師本道常詰、佐藤元萇」とある。明治三十年八月七日八十歳で亡くなる。

斎藤養元

文化三年（一八〇六）三月十五日河沼郡青津村（現・会津坂下町）に生まれる。斎藤家は養元の代まで十四代も続いた古い会津の医家である。文政十二年（一八二九）医を以って藩の書院に出仕し、天保二年（一八三一）産子

方仕役となり、坂下組・牛沢組・青津組・高久組・高田組・中荒井組・橋爪組・八木沢村の医師触頭を命じられる。明治以前は医学校など無かった時代で、養元自身が門弟を養成した為に会津一円から医学を学びたい人が集まり多くの門人を世に送り出した。戊辰戦争時には藩に駆けつける。その後、明治十二年内務省から医術開業の免許証を受け、自宅に漢学塾を設けて子弟の教育にあたり地方の文化に尽力する。

杉原　凱

文化三年（一八〇六）若松で生まれ、外之助と称す。幼い時から学問を好み、安部井帽山に経義を学び、後に子弟の教育に当たった。医学寮の師範補助となり本草科の教授となった。戊辰の役後は斗南に移り、明治四年二月十四日三戸で亡くなる。

馬島瑞園

文政八年（一八二五）十月馬島瑞延の次男として生まれる。名は芳、字は蘭叔、号を杏雨・養眞亭という。

父の馬島瑞延は小松姓であったが、幕府の眼科医馬島の門に入り医学を学ぶ。もともと記憶力は優れ秀才であったため、ことごとく修め、師に勝る技量を顕わし馬島姓を与えられたが、同門生の妬みを買い、師の許しを得て全国巡遊に出た。会津に入った時に、たまたま藩主松平容敬が疱瘡と眼の患いを瑞延が治したので会津藩に仕えることとなった。瑞園は日新館に入り杉原凱（外之助）と鈴木玄泰に内科・外科・本草学を、眼科を父瑞延に学んだ。安政年間（一八五四―九）藩医となり江戸に勤務する。帰藩後は日新館医学寮の教授となる。頼鴨涯（頼山陽の三男）が会津に来遊すると瑞園が交接する。会津藩が京都守護職を拝命すると京都に随行、戊辰戦争には藩主容保の傍らにあって籠城、開城後は藩主に従がって上京、因州藩邸に預けられ、次に紀州藩邸に移され謹慎となった。赦免後の明治四年容保に従い斗南へ移る。儒学に明るく、後年は医業を廃し能書家と書画鑑定家として活躍する。大正九年（一九二〇）九六歳で亡くなる。

安田　忠

寛延三年（一七五〇）若松で生まれ、名を庭縣と称す。医学を修め、寛政三年（一七九一）医学館の会読師となり教授を務める。同六年（一七九四）四月江戸の本草学士であった佐藤平三郎が来藩すると、二人で郡村を巡回する。享和三年（一八〇三）本草科の師範となり、更に吉村寛泰と共に医学館都講に抜擢された。道三翁長壽法を守る。後に蔵書六百巻余を医学館に寄贈する。詩・書を嗜み、松亭は号である。天保十年（一八三九）八月八日八十九歳で亡くなり、実成寺に葬る。専光院全詳秀玉日忠居士。

児島雲碩

宝永七年（一七一〇）九月二十二日児島丹三郎寛長の長男として生まれる。諱を元敬、号を西山と称す。安永八年（一七七九）三月七十歳で亡くなる。

児島宗説

元文五年（一七四〇）町医児島雲碩の四男として生まれる。諱を冲夫・惟翮、号は楊皐と称す。松平六代藩主容住の時に侍医頭となり秩百石を賜る。著書は『会津藩医史年表』によると、『古医方晰義』・『脚気論』・『仁壽編』・『温疫論及び舌圖解』などがある。文化八年（一八一一）八月二十九日八十六歳で亡くなる。

児島雲琳

安永七年（一七七八）十二月二十三日生まれる。君玉・医仙とも称す。『諸士系譜』によれば、寛政八年（一七九六）十九歳で江戸に遊学して医学を学ぶ。貞昭公・欽文公の診療を仰せつかる。文化九年京都に赴き医学を学び、さらに長崎にて蛮医等を学んだとある。文化十二年（一八一五）五月十六日五十二歳でなくなる。

児島宗瑛

享和元年（一八〇一）児島雲琳の長男として生まれる。高明・惟巖とも称す。

宇津野松伯

天和元年（一六八一）宇津野忠清の男として生まれる。茂只・清範とも称す。安永六年（一七七七）三月二十四日九十六歳で亡くなる。

宇津野松悦

正徳四年（一七一四）七月二十四日郭外四ノ町にて宇津野清範の次男として生まれる。清茂と称す。有賀玄通の門に入る。天明五年（一七八五）正月八日七十歳で亡くなる。

宇津野松伯茂且

寛保二年（一七四二）五月二十二日郭外四ノ町で宇津野清茂の嫡子として生まれる。弥市・眞茂とも称す。享和元年（一八〇一）七月十七日亡くなる。

宇津野彌久

安永八年（一七七九）七月二十五日尾岐郷松岸村で宇津野茂且の男として生まれる。茂雅とも称す。八歳にて高橋對馬守の門弟となり学ぶ。享和二年（一八〇二）四月江戸に出て河野良以の門に入り医学を学び、翌年若松に帰り天寧寺町に住し、医業繁昌する。文化四年（一八〇七）小書院御目見とな

り二人扶持金子二両を賜る。天保十四年（一八四三）御側医御雇勤五人扶持となり房総常詰医師に召出される。嘉永七年（一八五四）八月四日七十六歳で亡くなる。

加賀山潜龍

文化八年（一八一一）三月十九日会津藩医児島雲琳の次男として生まれ、翼・仁山とも称す。会津藩医加賀山盛俊に子がなかったので、その養嗣子となる。天保五年（一八三四）二十四歳にして家業を継ぎ、御側医百石を給わる。藩に願い出て江戸に赴き奥医師多紀法印元堅について研修、さらに池田瑞仙の門に入って種痘を修めた。この間、若年寄横山主税常徳（のち江戸家老）の助言により、真の医家は漢洋二法を兼修しなければならずとなし藩命により、安政四年（一八五七）江戸に遊学し伊東玄朴・織田研育らについて更なる西洋医学を学ぶ。洋医の大先覚者である。安政年間江戸でコレラ大流行した時に、江戸藩邸でコレラ治療法の蘭書を日本語訳『昆刺地格烈刺篇』（コンラッ・コレラ編）を出し世間に公開する。本書の序に師たる幕府侍医伊東玄朴・伊東貫斎の激賞の辞あり。会津で日新館医学寮に蘭学科及び舎蜜会が設立されると藩医の加賀山潜龍・吉村二洲（寛敬）は蘭学科、山根敬造が舎蜜会（化学）の教授となった。さらに江戸三家老の一人と称された横山主税常徳が加賀山潜龍に宛てた消息に、医師達の子弟が遊学する際の資金に難儀する者がおり、医師達による遊学資金の方策が述べられ、この事が参考になり加賀山潜龍と佐藤雄庵が遊学推奨資金財団をつくり遊学の道を開いた。その後は医業のかたわら会津郡戸沢村を開墾して二百石余の収益をあげ、戊辰戦争では自ら兵を率いて、長沼に行き兵事にも奔走した。敗戦後は隠退し明治四年四月二十九日六十一歳で病死する。著書には『古医方發蒙三巻』・『古今大眼一巻』・『痧病新書一巻』などがある。

師である池田瑞仙は天然痘ウィルスの予防に関して当時の数少ない医師である。徳川家康と蒲生氏郷の孫にあたる会津六十万石藩主蒲生忠郷は痘瘡の病にかかり亡くなるが、当時、天然痘（痘瘡）はたびたび流行を繰り返す感染症で大勢の死者が出た。池田瑞仙について、曾祖父正直は長崎に来ていた明の戴曼公より痘科の秘術を伝授され、図説を作り家に伝える。瑞仙は安永六年（一七七七）痘瘡が流行した時に、伝来の図説を用いて治療を施しそれなりに効果をあげた。寛政九年（一七九七）幕府の医官となり、医学館で始めて痘科を教えた。文化十三年（一八一六）亡くなる。著書に『痘科辯要』、『痘疹戒草』、『痘科鍵刪正』、『治験録』などがある。中国の種痘は『衣苗法・痘衣種法』、『漿苗法』、『早苗法』の四つ方法があったといわれている。

日本での秋月藩医の緒方春朔が寛政元年（一七八九）人痘接種法による接種を成功させた。天然痘の瘡蓋（かさぶた）を粉末にして鼻孔に吹き入れる方法であったが安全性が問題であった。なお国内での牛痘接種は、川中五郎治がロシアに拉致され帰国後に牛痘を用いた国内初の接種を行ったのは文政七年（一八二四）のことであった。彼が持ち帰った種痘書は幕府の馬場佐十郎によって和訳されている。その後種痘の技術は函館の医師、高木敬蔵・白鳥雄蔵などにより秋田、さらには京都に伝達されたというが、何故か現実化に至らなかった。

天然痘（痘瘡）の予防のために、それまで行われていた危険な「人痘接種法」にかわり、安全な天然痘ワクチンの開発は、一七九六年（神武紀元の寛政八年）にイギリス人医師エドワード・ジェンナーによる牛痘ワクチンを皮内に接種する「牛痘種痘法」であった。当時のイギリス政府がジェンナー以外の方法を禁止するほど効果的で安全性が高かった。

日本では人痘種痘法が伝来し治療が行われていたが、しばしば死に至る危険な方法であった。嘉永元年（一八四八）長崎出島のオランダ商館医として派遣されたオットーモーニッケが日本に安全な「牛痘接種法」を最初にもたらした。会津藩では吉村二洲がオットーモーニッケから西洋医学と牛痘種痘に関して直接指導を受けた。この天然痘予防接種は天然痘ウィルスが撲滅された昭和五十一年を境に行われていない。

（三）近世末期の会津藩の医師

この時期の医師については、文久元年から同二年（一八六一～二）の『会津藩近習分限帳』（通称『文久分限帳』）と、慶応元年（一八六五）の『慶応分限帳』、それに慶応年間（一八六五～七）の古記録三冊を平成四年に会津郷土資料研究会が編纂した『會津藩士人名録』の三種類が現存している。この分限帳を元に會津藩医を記述するが、共に原本とは考え難く、『會津藩士人名録』では古記録に記載されているままに編集した為、誤字誤記があると思われると凡例で述べている。慶応期の分限帳が二種類あるが、どちらも数名記載のある人、無い人がいる為、『慶応分限帳』を記述し、『會津藩士人名録』にだけ名前のある人を列記する。

『文久分限帳』に見られる医師

百七十石	御側医師本道外科兼務常詰	渋谷昌益
百石	御側医師本道外科兼務	羽入譲良
百二十石	御側医師本道外科兼務	鈴木玄甫

百五十石	御側医師本道外科兼務	土屋一庵
十八人扶持	御側医師本道外科兼務常詰	坂井宗甫
百五十石	持席御側医師本道	田中春佐
十八人扶持	持席御側医師本道外科兼務	三浦譲隆
九石二人扶持	医師師範	大岩嘉蔵
十八人扶持	御側医師本道常詰	鈴木玄泰
十八人扶持	御側医師本道	東條玄碩
十八人扶持	御側医師本道	小池求眞
八人扶持	御側医師格医師本道外科兼務	田中雲冲
五人扶持	御側医師格医師本道外科針科兼務	塚原杏禎
百石	御側医師格医師本道	加賀山潛龍
七人扶持	御側医師格医師外科	吉村二洲
百石	御側医師格医師本道	齋藤良純
百三十石	御側医師格医師本道常詰	吉岡昌玄
十人扶持	御側医師格医師本道外科兼務常詰	荒井東道
百石	御側医師格医師本道	児島宗瑛
八人扶持	御側医師格医師本道外科兼務	木村松渓
十一人扶持	御側医師格医師本道外科兼務	根本醫碩
五人扶持	御側医師格外科	佐藤玄龍
	御側医師格医師本道	安田良俊
八人扶持	御側医師格医師本道	目黒玄英
五人扶持	御側医師格医師産科外科兼務	賀川謙瑞
百石	御側医師格医師産科外科兼務	羽入謙瑞
七人扶持	御側医師格医師外科兼務	馬島瑞園
五人扶持	御側医師格医師外科	関　良真
八人扶持	医師外科	平井元亨
七石五斗二人	医学師範補	杉原外之助
三両二人	医師本道	星野雲意
五人扶持	医師本道	望月要珉
百石	医師本道	池内玄丈
三両二人扶持	本道	林　耕養
五人扶持	本道	宇津野松甫
七人扶持	本道外科兼務	高橋順甫
五人扶持	本道	山内玄養

百石	本道	橋爪玄洞
五人扶持	本道外科口科兼務常詰	河村譲益
七人扶持	本道常詰	齊藤仁壽
	外科	西田松意
	針科本道外科兼務	塚原杏益

『慶応分限帳』に見られる医師

百七十石	御側医師切送御料兼務	渋谷昌益
		（會津藩士人名録では二百石）
	御側医師切送御料兼務	土屋一庵
		（會津藩士人名録には記載無し）
十八人扶持	御側医師切送御料兼務	坂井宗甫
十八人内五人	御側医師切送御料兼務	東條玄碩
百五十石	持席御側医本道	田中春佐
十八人扶持	持席御側医本道外科兼務	三浦謙良
百石	医師本道	斎藤良順
百三十石	医師本道京都常詰	吉岡昌玄
十八人扶持	医師本道	小池求真
	本道外科兼務常詰	馬島瑞園
		（會津藩士人名録では十八人扶持）
十八人扶持	本道外科兼務常詰	石田龍玄
百二十石	本道京都常詰	鈴木玄甫
七人扶持	御側医師格医師本道洋医	吉村二洲
十二人扶持	御側医師格本道外科兼務	荒井東道
百石	御側医師格本道	児島宗瑛
	御側医師格本道外科兼務	木村春渓
		（會津藩士人名録では七人扶持）
	御側医師格本道外科兼務	根本醫碩
		（會津藩士人名録では十一人扶持）
十一人扶持	御側医師格本道外科針科	佐藤玄龍
		（會津藩士人名録では名前無し）
	御側医師格医師外科	安田良儕
		（會津藩士人名録では名前無し）
八人扶持	御側医師格医師本道	目黒玄瑛

五人扶持　御側医師格産科外科兼務　賀川謙瑞
五人扶持　御側医師格医師外科　関　良真
五人扶持　御側医師格本道外科兼務　日下順庵
八人扶持　御側医師格医師本道常詰　平井元亨
百石　御側医師格医師本道　池内玄丈
五人扶持　御側医師格医師本道　宇津野松甫
（會津藩士人名録では宇津木松甫とある）
七人扶持　御側医師格本道外科兼務　高橋順甫
御側医師格本道外科□科兼務　河村隠定
（會津藩士人名録では十八人扶持　川村謙益）
三両二人　御側医師格医師本道　星野雲意
三両二人　御側医師格医師本道　林　耕養
七人扶持　御側医師格本道蝦夷地常詰　角田良智
五人扶持　御側医師格医師本道　望月要眠
七石五斗二人　持席医学師範外科師範手伝　杉原外之助
（會津藩士人名録では日新館医学師範）
百石　御側医師格医師本道洋医　加賀山潜龍
七人扶持　御側医師格本道外科兼務　田中雲沖
百石　御側医師格医師本道　橋爪玄閑
御側医師格医師本道常詰　斎藤玄清
（會津藩士人名録では名前無し）
六人扶持　御側医師格本道外科蝦夷地常詰　武藤英惇
五人扶持　御側医師格医師本道　穴澤元庸
（會津藩士人名録では名前無し）
五人扶持　御側医師格医師本道　六須見玄国
五人扶持　御側医師格本道越後御新領詰　吉岡隠定
（會津藩士人名録では名前無し）
五人扶持　御側医師格医師本道常詰　佐藤元蓑
五人扶持　御側医師格本道蝦夷地常詰　大塚修省
五人扶持　御側医師格本道蝦夷地常詰　佐藤周庵
十人扶持　御側医師格医師本道　南部瑞真
（會津藩士人名録では洋医）
八人扶持　御側医師格医師外科　西田玄辰
五人扶持　御側医師格医師外科　百崎養軒

五人扶持　御側医師格本道針科兼務　塚原杏萱
（會津藩士人名録では名前無し）
米二十俵　御合力医師　和田玄輪
米二十俵　御合力医師　関山春芳
米二十俵　御合力医師　諏訪宗節
米二十俵　御合力医師　斎藤玄泰
（會津藩士人名録では元泰）
米二十俵　御合力医師　斎藤養元
米二十俵　御合力医師　宇南山宙斎
米二十俵　御合力医師　糟尾盧庵
米二十俵　御合力医師　斎藤良甫
米二十俵　御合力医師　赤城求碩
米二十俵　御合力医師　佐藤忠仙
（會津藩士人名録では忠撰）
米二十俵　御合力医師　森川玄智
米二十俵　御合力医師　森川春斎
米二十俵　御合力医師　大島英庵
米二十俵　御合力医師　角田洲碩
（會津藩士人名録では洲英）
米二十俵　御合力格御取扱江戸　安田玄栄
米二十俵　御合力医師　間宮謙長
米二十俵　御合力医師　荒川玄伯
米二十俵　御合力医師江戸　鈴木三省
米二十俵　御合力医師　佐藤玄寿
（會津藩士人名録では玄孝）
米二十俵　御合力医師　三本英春
米二十俵　御合力医師　戸田禎忠
米二十俵　御合力医師　吉川周碩
米二十俵　御合力医師　渡部春良
米二十俵　御合力医師　真船玄静
（會津藩士人名録では貴船玄静）
米二十俵　御合力医師　谷内良願
（會津藩士人名録では良顕）
米二十俵　御合力医師　松永沖蔵

米二十俵　御合力医師　（會津藩士人名録では沖龍）
米二十俵　御合力医師　三浦龍仙
米二十俵　御合力医師　斎藤良蹟
米二十俵　御合力医師　菊地逸斎
米二十俵　御合力医師　板橋昌庵
米二十俵　御合力医師　佐藤見綱
米二十俵　御合力医師　（會津藩士人名録では見端）
米二十俵　御合力医師　山田謙造
米二十俵　御合力医師　三島春甫
米二十俵　御合力医師　斎藤良善
米二十俵　御合力医師　（會津藩士人名録では名前無し）
米二十俵　御合力医師　大沼雲庵
米二十俵　御合力医師　谷内宗惇
米二十俵　御合力医師　山名良斎
米二十俵　御合力医師　伊東玄岱
米二十俵　御合力医師　秋山□斎
（會津藩士人名録では啓斎）

『會津藩士人名録』に見られる医師

百石　本道外科兼務　（『慶応分限帳』には名前無し）
五石二人扶持　日新館医学師範補　羽入譲良
五人扶持　本道越後御新領　秋山左衛門
五人扶持　本道外科　真宮謙益
五人扶持　洋医　穴澤良養
五人扶持　洋医　古川春英
五人扶持　医師御雇　宗瑛叔父　伊東玄岱
五人扶持　医師御雇越後御新領　児島浩意
五人扶持　医師御雇　吉田宗園
五人扶持　医師御雇　相澤玄理
五人扶持　医師御雇　佐藤春的
五人扶持　医師御雇　渡部洲益
五人扶持　医師御雇　谷　玄亮
五人扶持　医師御雇　斎藤幸元
四人扶持　御合力医師格　高橋良節
四人扶持　御合力医師格　安田元貞
四人扶持　御合力医師格　二瓶宗碩
四人扶持　御合力医師格　宇津野松雲
四人扶持　御合力医師格　越智良庵
四人扶持　御合力医師格　佐藤仲得

赤城信一

天保十二年（一八四一）六月十五日会津猪苗代の儒医阿部昌信の三男として生まれ、会津塩川にて代々医業に従事し藩医の伯父赤城泰和（求碩）の養子となり赤城家を継ぐ。安政二年（一八五五）十六歳で江戸に出て吉村二州（篤敬）の門に入り、さらに伊東貫斎・織田研斎について蘭学及び洋方医学を学んだ。安政五年（一八五八）会津藩の医師仮雇勤となり当時流行していたコレラの治療に当たるが、伊東貫斎と意見が合わず会津に帰る。慶応二年（一八六六）長崎遊学を藩より下命され京都に至るとき戊辰戦争が突発して故郷に急ぎ帰る。会津戦争においては江戸より駆けつけた松本良順の指揮下で南部精一郎・古川春英等と共に戦陣医療にあたる。敗戦後は榎本武揚と函館に入り負傷者の治療にあたる。その後は公立室蘭病院の初代院長を勤め、札幌に移り北海道医事講談会（北海道医師会の前身）の副会長となる。明治二十九年二月一日五十八歳で札幌にて亡くなる。

大岩嘉蔵

漢方医で本草学者。書・画を嗜み、号を榕園と称す。元治元年（一八六四）二月七十歳で亡くなる。

大河原臣教

儒者で医師。安永八年（一七七九）藩医の家に生まれる。幼少より儒と医の両科を修め、十三歳の折、藩公より仲景全書を賜り、神童と謳われた。寛政十年（一七九八）医籍を脱し儒学者に帰り文学を講じるよう命じられる。享和三年（一八〇三）家督を継ぎ百三十石を与えられ、司業添役となる。文化五年（一八〇八）蝦夷地警備に従軍し三十石の加増を受ける。文政四年（一八二一）郡奉行となり役料百四十石を給される。天保三年（一八三二）二月五十二歳で亡くなる。

小池求古

会津藩医で学者として知られる。若松の年中行事などの中から本草関係その他の資料を集めて天保十二年（一八四一）『会津歳時記』として著述した。

斎藤良禎

医師、小田付の人。俳諧を嗜む、号は常則・片玉堂と称す。嘉永四年（一

八五一）三月二十五日七十五歳でなくなる。

清水羽長

会津で生まれ、伝右衛門・義友・僊禽舎・一清庵・叢斎とも称す。武を好み刀術の門人が多く、俳諧をよくし、医術、艾灸の治術にも達し、奇薬方の書物を集蔵する。『僻疾論』『外家訓』のほか、当時の文人墨客の作品を収めた『清雅集』や俳諧の『萩日集』などの著書がある。

二瓶宗順

飯豊山麓の山三郷の医師。吉村二洲（寛敬）の門人で、安政三年（一八五六）種痘を願い出る。

古川春英

天保二年（一八三一）河沼郡駒板村（現・福島県会津若松市河東町金田字駒板）の農家に生まれる。幼名を留吉、のちに英敏と称した。初め若松の医師山本春隴について医術を修め、十二歳の時、当時東北唯一の外科医であった米沢の高橋氏の門を叩く。その後、大阪に出て緒方洪庵の適塾（洪庵塾）に入門して蘭学と蘭方を修めた。安政四年（一八五七）日新館内に蘭学所が設置され山本覚馬・南摩綱紀が教授となった時、急ぎ帰国、蘭学所の教授に迎えられた。しかし、保守的なために会津藩の医師達と合わず、万延元年（一八六〇）大阪に赴き、山川海介の変名で再び緒方洪庵門下に入り、再び緒方洪庵のもとで蘭方の習得に努めた。元治元年（一八六四）藩より京都医師雇勤として召されるが辞退して、長崎に遊学し、精得館のオランダ人医師ボードインから本格的に西洋医学を学んだ。戊辰戦争では藩から呼び戻されて急ぎ帰藩し、幕医松本良順を助け負傷者の治療に大活躍した。戦後は河沼郡島村（現・会津若松市河東町）の治療所長となり負傷兵の治療と高進の指導に当たり、明治三年（一八七〇）腸チフスが多く発生すると会津若松千石町の治療所でチフスの治療に当たっていたが、師のボートウインが東京に来た事を聞き、再び教えを受けようと考えたが自ら腸チフスに感染し明治三年（一八七〇）十一月七日享年四十歳で亡くなる。なお、古川春英の子息古川源次郎（横浜市港北区日吉四丁目慶應義塾大学日吉キャンバスの並びに、吉川医院を経営）が書いた『古川春英外伝』によると、「春英は□才の時、吉村二州（会津藩医）の長女貞子を迎いられたり。貞子は先に高橋修斉なる者を聟として二男をありしが、一男は生後いくばくならずして没し、次男豹一郎と称せしが終生不身持の為、離縁したる後、豹一郎を連れ子にして春英に嫁し来れり」とある。

吉村二洲

生没不詳、寛敬と称す。吉村二洲は吉村二州篤敬（交甫）の一子で、二州篤敬の兄は約二十年の歳月をかけ『日新館志』三十巻を完成させた吉村寛泰が、弟の二州篤敬を寛政七年から同十一年（一七九五～九九）まで医学修行の為に江戸に遊学させた。また篤敬の子で甥にあたる二洲（寛敬）に西洋医学を勉強させるために、弘化二年（一八四五）に長崎へ遊学させた。吉村寛泰の自費であったといわれるが、吉村寛泰は弘化元年に亡くなっていることから、吉村家で面倒を見ていたものと考えられる。遊学中の長崎では蘭学・蘭方医学を学んでいる最中、嘉永元年（一八四八）長崎出島のオランダ商館医として派遣されたオットーモーニッケから西洋医学と牛痘種痘の直接指導を受けた。ニッケはドイツの医師で日本に牛痘苗を最初にもたらした人物である。その後、二洲は帰国をして治療にあたり会津では種痘の大恩人といわれるようになる。安政六年（一八五九）日新館医学寮では蘭書および舎蜜の会が設立され、医学は藩医の加賀山翼（潜龍）・吉村二洲（寛敬）・山根敬造の三人が教授に選ばれ、洋医学の研究と伝習が図られた。なかでも天然痘治療の担当は吉村二洲が主に行っていた。吉村二洲は嘉永六年（一八五三）門人達に種痘治療に関して講義を行う。この時の内容の一部が、門人の森川春斉と佐藤祐益が書き記した口授『牛丹種痘児保護法』八項目が現存している。安政四年（一八五七）疱瘡流行に際して吉村二洲・馬島瑞園・宇南山宙斉等で若松城下並びに南会津郡下に於いて種痘を行う。安政七年（一八六〇）検断の飯岡家に残る『飯岡日記』によると、種痘の願い出がなされ、桂林寺町の吉村二洲・横三日町の吉村交甫・一之町の宇南山宙斎の医師三名に呼び出しがなされている。吉村二洲の住まいは安政六年には城下桂林寺町（現・会津若松市中町二ノ三八）に居住し治療にあたっていた。万延元年（一八六〇）にも藩では疱瘡をしていない者に対して吉村篤敬（交甫）、二洲寛敬親子と宇南山宙斉の三人から種痘を受けるように注意をうながした。明治元年九月四日になると二洲は会津高田町雀林村法用寺に病院を開き治療にあたり、明治三年には若松に戻り四ノ町で開業、明治八年の「若松種痘医名簿」や明治十年の「若松町内種痘医」には名前があるが、明治十九年の「若松医師会名簿」からは消え消息不明となる。吉村家の菩提寺である会津若松市内の久福寺にあった墓はかなり以前に、子孫の方により県外に移し替えられた。

おわりに

調査不十分のところも多いため、今後会津の医学を調べる方にとって、少

しでも参考になるところがあり、間違いなどがあれば訂正・補足していただければ幸いである。

〈謝辞〉

今回の調査にあたり、福島市の安斎勇雄さん、会津若松市の日下君子さんと松枝千代子さんから大変貴重な資料の提供を頂きました。また仙台市の平賀恒さんや会津若松市の吉田幸代さん、鈴木啓二さん、斎藤允邦さんなど大勢の人からご協力と御指導を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

〈付記1〉

本稿執筆のきっかけは、平成二十年（二〇〇八）に立ち上げた会津医学史研究会（当初は会津医学史・薬学史研究会）にある。この研究会は、会津の医学や医師の歴史に興味をもっていた五十嵐康善（漢方薬剤師）、戸田憲一（歴史研究者）、高橋充（県立博物館学芸員）・森田鉄平（野口英世記念館学芸員）・米山高仁（米山眼科医院）が、渡邉明（会津若松市文化財保護審議会委員）の呼びかけで集まり、総勢六名で立ち上げて調査をすることになった。会津藩に関するものは『家世実紀』、民間に関するものは「簗田家文書」が一級の史料で、会員全員で一年程かけて調べた。誰を治療したとか医師名だけは調べることができ、松枝・友田両先生の年表を補足することもできた。しかし、研究会は平成二十三年（二〇一一）の東日本大震災の為に休会になり、今日に至っている。

本稿は、渡邉があらためて調べ直して執筆し、高橋が一部を分担し、全体の整理等を行った。

〈付記2〉

葦名時代の分限帳『蘆名家舊臣記』「御医師方」（会津図書館蔵）に医師の名を三十三名見ることができる（渡邉明）。

御医師頭糟尾宗頤　糟尾順庵　薄宗甫　永田休民　松山友伯
糟井卜純　高橋柳意　坂内宗瑞　平圓山　菊地依三　大堀幸可
佐倉玄朴　白井道慎　鈴木道古　星永朝　岩田宗庵　二瓶有節
平田了節　遠藤性順　赤田立庵　芝山良以　長嶋元以　神嶋雲石
笠間良策　佐藤玄碩　金田正庵　赤木永博　豊嶋瑞仙　丹波良哲
目黒宗真　小荒井泰麟　永嶌元策　舟子聖麓

〈参考文献〉

○中世
入間田宣夫「八条流馬術の受容と戦国社会」大石直正・小林清治編『陸奥国の戦国社会』高志書院　二〇〇四年
小林清治「戦国期南奥の武士と芸能」小林清治編『中世南奥の地域権力と社会』岩田書院　二〇〇一年
駒場一男「蘆名盛氏と医師糟尾宗頤」平成二八年度国指定史跡向羽黒山城跡歴史講演会資料
佐藤博信「田代氏の研究」『古河公方足利氏の研究』校倉書房　一九八九年
高橋充「戦国時代の葦名氏と医療」『国史談話会雑誌』三五　一九九五年
高橋充「葦名盛氏の『止々斎』号－葦名氏発給文書の検討　その一－」『福島県立博物館紀要』九　一九九五年
服部敏良『室町安土桃山時代医学史の研究』吉川弘文館　一九七一年
服部敏良『日本史小百科20　医学』近藤出版社　一九八五年
星寛「糟尾宗頤について」『北会津の文化財』一七　北会津村教育委員会　一九九一年
盛本昌広「中世の養生」網野善彦他編『列島の文化史』8　日本エディタースクール出版部　一九九二年
矢数道明『近世漢方医学史　曲直瀬道三とその学統』名著出版　一九八二年
矢数道明『漢方の臨床』「日本医学中興の祖　曲直瀬道三」
「田代三喜と猪苗代兼載」『古河市史』
「古河公方の職能衆」『鷲宮町史』通史上巻　一九七六年

○近世
大塚敬節・矢数道明編『近世漢方医学書集成』巻一〇七　目黒道琢
小川渉『会津藩教育考』明治十六年編纂　昭和六年発行　平成十九年復刻
鈴木茂雄『會津の書林』昭和四十七年発行
友田康雄『会津藩医学史並びに明治以後の医学史』會津若松医師会々報
友田康雄『会津藩の医家先哲畧伝並びに洋学の推移に就いて』
昭和二十四年五月二十六日会津史談会席上講演
富士川游・小川鼎三校注『日本医学史綱要』平凡社
松枝茂「会津藩医史年表」『日本醫学雑誌』一二九四号
松枝茂『会津藩の種痘について』会津史談会叢書第十六集

松枝和夫『みちのくの産婦人科小史・会津産婦人科を拓いた医林』
山崎佐『各藩医学教育の展望』国土社
山崎佐『会津藩洋学発達史』会津史談会誌第三十五号
山崎佐『日本醫事法制の研究』昭和二十八年十二月発行
渡邊松淵『会津墨客録』昭和六年発行
『会津藩家世実紀』一～十五　吉川弘文館　一九七五～一九八九年
『日新館志』巻七
『簗田家文書　御用・公用日記』第一巻　歴史春秋出版　二〇〇五年
「会津旧事雑考」『会津資料叢書』下巻　歴史図書社　一九八三年
『福島県史』二二人物　一九七二年
『福島県人名事典』時事通信　大正三年
『海仙自敘漫録』　日下毅の三女智、八十四歳が自敘漫録二巻を書き写す。
『福島県立医科大学史』
『福島百年の人びと』福島民友新聞社　昭和四十三年二月二十五日
『会津藩の英学』
『若松案内記』　明治四十二年発行
『財団法人竹田綜合病院　六十年』竹田綜合病院六十年史編集委員会
『会津高田町の医師たち』昭和四十四年出版